



NPO法人 あすみが丘国際交流

Newsletter



プルメリア

ラオスの国花

No.92 2023.7.25 発行 会員数 713 名 (2023.2.19 現在)
住所 〒267-0066 千葉県緑区あすみが丘 4-1-6 エクレール土気 101
TEL/FAX : 043-294-9551 E-Mail : aifs@eastcom.ne.jp
ホームページ : <https://www.npo-aifs.org/>

今年イベントも戻り活動的な夏となっていますね。体調管理に気をつけて楽しみましょう。さて今号は、昨年プラザまつりで講演して下さった、土気高校 ALT リズ先生 (Elizabeth Xiong さん) のモン族の話を掲載します。海外旅行や、報道、SNS など、世界が身近になった現在でも他国の情報や歴史を私たちはどこまで理解できているか、ましてや民族のそれについては知らないことがとても多いです。モン族の魂を受け継ぐリズ先生、その歴史に対する敬意を感じる寄稿です。

The Minority Asian

Hello there. My name is Elizabeth Xiong and although my last name might confuse people, I am from America. My parents were born in Laos, yet we are not Laotian. Here is where many people start to get confused. Now, imagine having to explain how this works to a high school class full of students who one, cannot completely comprehend English, and second, could care less about it altogether.

Here in Japan, since I am an English teacher, students also have many questions. I look like them, yet somehow, I am not fluent in their language. My last name sparks theories about where I am from. The faces of shock when they learn that I am from America is something that will always make me chuckle. Little do they know, where I am from is the easiest thing to explain about myself. My background, on the other hand, is the most complicated thing to explain not only to Japanese students and teachers, but also to any American back in the United States.

I am Hmong, or Hmoob if you write it in the Hmong language. My ethnic group originates from the mountainous regions of China. Due to war, imperialism, and genocide against our people, many of the Hmong people in China were left with no choice but to flee to other countries such as Laos, Thailand, and Vietnam. But war did not stop there. When the Vietnam War happened, many Hmong people from Laos were recruited to fight alongside the United States against the Viet Kong. My grandfather on my mother's side was one of many Hmong people who were recruited. And although he fought alongside Americans, he, like many other Hmong soldiers, is not recognized as a veteran. Thankfully, one benefit that came from his assistance was that his family could be sponsored to go to America. Through many Christian churches, America families became sponsors to support Hmong families in their time of need in finding a new place to call home. That is how my parents were able to get to America. And thus, many years later, I was born.

During the harsh times of war and constant displacement, the Hmong lost various part of themselves, but also gained a great deal as well. Many lives were lost, but in return, it strengthened the passion and desire to keep traditions, names, and legacies alive. The necklaces that were once forced to be put around the necks of Hmong slaves for identification, we now wear with pride and our traditional clothing to show the hardships that our people had to endure. We were driven out of our homeland, but persevered and found new homes to call our own. In the process of fleeing, we lost many of our belongings, some of which were believed to have our original language written in them. But in Laos, between 1951 and 1953, with the help of missionaries and Hmong advisors, our written Hmong language was developed.

Nowadays, in America, the Hmong are prevalent in many states such as Minnesota, California, and my home state, Wisconsin. Each of our last names represents one of thirteen different Hmong clans that we belong to. Every Hmong person with the same last name is considered family even if it is not by blood. And although many people have made adjustments to some of the Hmong traditions, the importance and meaning behind them is still very strong.

Despite the fact that I am not fluent in my culture's own language, I can speak and understand enough

to have conversations, and I believe that is a start. Many people might find it tiring and frustrating to continuously explain their background, but for me, our stories are never ones that are typically known or shared, so I am always more than happy to educate people on a history that they were never taught or never knew existed. With every class I teach, I introduce a little bit about my background and each time, I always tell my students that even if you do not understand my culture or its history, it is understandable and okay because even in the United States, there are still a vast majority who have never even heard of the Hmong people. But I will always be willing to share, teach, and inform about my culture and who we are. We are the Hmong people.

アジアの少数民族 モン

こんにちは、私は Elizabeth Xiong です。私の姓に違和感を感じる方がいると思いますがアメリカ人です。私の両親はラオス生まれですが、ラオス人ではありません。説明を聞いていると、もうこの辺で多くの方が困惑や戸惑いを感じているかもしれません。英語の理解が完全でない、もしくはこのような問題に関心のないクラスの生徒たちにどう説明したらよいか想像してみてください。

私は英語の教師をしていますので、生徒たちからはよく質問されます。私の容姿は日本人に似ていますが、日本語が流暢ではありません。そこで私の Xiong という姓を聞いた時にどこの出身だろうと思うわけです。私がアメリカ人と知った時の、ショックそうな顔は、いつもちょっと微笑んでしまいます。多くを知る必要がないなら国籍が一番簡単な紹介になると思います。でも私のバックグラウンドは日本人の生徒や教師にだけでなくアメリカでも説明し理解してもらうには複雑です。

私はモン族に属します。モン族は中国の南部山岳地帯に由来します。戦争、帝国主義、集団虐殺により、中国に居たモン族はラオス、タイ、ベトナムなどに逃げ出さざるを得なかったのです。その後も国境地帯で争いは絶えませんでした。ベトナム戦争が起こった時に、ラオスに居たモン族はアメリカに味方しベトナムへの攻撃を頼まれます。私の母方の祖父はこの従軍に参加したモン族の一人です。祖父は参戦しアメリカ人とともに戦ったにもかかわらず、他のモン族兵士同様に退役軍人の待遇をえることができませんでした。有難いことに祖父の従軍は、家族がアメリカに受け入れられる資金援助を得ることをもたらしました。教会を通じてアメリカの家族が新しい故郷を見つけるスポンサーとなってくれました。こうして私の両親がアメリカに居ることができたのですが、さらにその何年か後に私が生まれたわけです。

うち続く戦争と迫害による退去が繰り返され、モン族は多くのものを失いました。多くの命が失われましたが、かえて伝統、名前、遺産を引き継いでいく意思を強くしました。蒙の奴隷の印としてつけさせられていたネックレスは民族衣装と合わせて耐えてきた困難を象徴するものとして誇りをもって我々は身に付けています。私たちは故郷を捨てざるをえなくなり、大変でしたが新しい故郷といえる場所を見つけました。戦いと逃避の中で多くのものを失いました。失ったものの中にはモン族の固有の文字で書かれたものも含まれていました。この結果、モン族は 1600 年代の中国で文字を書くことを禁じられていたこともあり、書き言葉の記録が残っていません。しかし、ラオスでは 1951 年から 1953 年にかけて宣教師団体とモン族の顧問が支援して蒙の書き言葉が開発されました。

今はミネソタ、カリフォルニア、そして私の故郷であるウイスクンシン州にもたくさんのモン族がいます。モン族の場合、同じ姓であれば血縁関係によらず同族だと見做されます。同族の中では結婚することはできません。みなモン族の伝統の一部に現代に合わせ調整や変更を加えてきていますが、伝統は重きをなしています。私はモン族の言葉に流暢ではありませんが、話せまし会話を理解することができます。話すことが固有文化理解のスタートになります。多くのモン族の人はそのバックグラウンドを説明するのに疲れてきています。でもモン族の話はそれほど十分に知れ渡っているわけではありません。私はこれまで語られてこなかった或いは存在さえも知られていなかったモン族の歴史を語ってみたいと思っています。私が教えるクラスでは必ず最初に私のバックグラウンドについて少し話しています。生徒達にはいつも私の文化や歴史が理解できなくても不思議ではない、アメリカにおいてもモン族について聞いたことのない人たちが多数なのだからと言っています。それでも、モン族の文化やその歴史、我々が何者であるのかについて語ってみたいと思っています。私達はモン族なのでから。



花いっぱい活動

事務所前花壇の花植え

5月28日(日)に総勢25名のボランティアがAIFS事務所前に集合してサルビア70株、ペチュニア50株、ガザニア20株の計140株の花苗をあすみ大通りの道路畔花壇に植付けを行いました。花壇は前日までに床土を耕し、培養土を入れ、整地して準備は万端。花苗は千葉市の街づくり助成制度を活用して無償提供して貰いました。今はまだ小さな花苗ですき間が目立つやや寂しい花壇ですが、やがてこんもりとした花々で満ち溢れ、通りを行き交う歩行者やドライバーにささやかなやすらぎと癒しの空間を提供するでしょう。

多様な参加者があり、25名の内、高校生が3名、イギリス出身1名、台湾出身2名でした。

土気駅前プランターの花植え

6月17日、梅雨入り後の貴重な晴天の日曜日。地元高校生5名を含む23名ものボランティアに集まって頂き、これから秋まで駅前の雑踏に安らぎというどりを添えるベゴニア150株を植付けました。ベゴニアの花弁の色は赤、ピンク、オレンジ、白など様々。花言葉は「幸福な日々」「愛の告白」「片思い」だそうです。

培養土の混入から、植付け、水遣りまで作業は1時間足らずで無事終了。

梅雨明けから秋口までの夏場は定期的な水遣りが不可欠です。ボランティアのみなさんの協力を得て水遣りも頑張ります。参加ボランティアの多様性はなかなかのもので、23名中、アメリカ人1名、タイ人1名、土気高校から男子3名、女子2名の参加があり平均年齢もずいぶん引き下げられました。



※ホームページにはこれ以外にも多くの写真が載っていますのでどうぞご覧下さい。

あすみが丘再発見～「みつばちプロジェクト in 土気あすみが丘プラザ屋上」～

皆さんは蜂蜜は好きですか？私は甘いもの好きで、蜂蜜も日頃より食していて他の甘味料にはない独特な香りと芳醇さがとても好きです。1匹のみつばちが一生涯かけて集められる蜜は、わずかにティースプーン1杯にも満たないと聞き、最近は蜂蜜を生み出すみつばちそのものにも興味が出てきました。みつばちのイメージは賢くて働き者。1匹の女王ばちの元でせっせと働き、次の命をどんどん生み出すみつばち達を目の前で見るチャンスはなかなかありませんでしたが、先日、あすみが丘プラザの屋上で養蜂が行われていて、それを見学できる講座があるというので行ってきました！

「みつばちプロジェクト in 土気あすみが丘プラザ屋上」の第2回目です。

前半の30分は座学。講師は養蜂歴18年の鈴木一さん、真夏の太陽も蜂も怖くなさそうなおおらかで逞しい雰囲気の方と思いましたが、話を聞くにつれ、養蜂は自らの動作や心持ちをゆったりと穏やかに保ち、澄んだ神経を必要とする繊細な仕事と感じました。鈴木さん曰く、養蜂家の仕事とは、みつばちの社会をキープしていくこと（持続可能にすること）だそうです。今まで、養蜂とはハチミツを採る仕事と思っていたのは間違いだったと知りました。養蜂家は、巣箱の温度をキープするための蜂蜜は残し、余分な蜜がある時のみ其れを取り除いて食用等に利用しているそうです。また、「みつばちの社会(巣箱の中)は1匹の哺乳類のようである」と話されていました。みつばちは昆虫でその1匹1匹は変温動物ですが、巣箱の中は恒温動物のように常に35℃～35.5℃に保たれ、育児はミルク(ローヤルゼリー※日本語では王乳という)で行われている。そして社会全体の「グループソウル(魂)」があり、まるで高度な一つの脳を持っているようだ。

昆虫を見に来たのに、哺乳類のようだとは目から鱗の話でしたが、その生態にますます興味が湧いてきました。

さて、いよいよ蜂とご対面です。当日は良いお天気であすみが丘プラザの屋上は思ったより広く、巣箱は建物の隅の方に二つ設置されていました。中には 15,000～20,000 匹のみつばちがいて、全体の約 90%がメス(働きばち)、10%がオス、そして 1 匹の女王蜂で構成されているそうです。巣箱の中には四角い木枠が並んでいました。その中の一つが持ち上げられると、沢山のみつばちがひしめき合い、ところどころ綺麗な蜜蝋の巣が見え、一部には蜜も蓄えられていました。初めは木枠だけを巣箱にセットするそうで、何も無いところに、複数の場所から巣を作り始め、最終的に巣が木枠いっぱいになった時には、計算されたようにピタッと狂いなく六角形が並ぶそうです。あんなに小さい頭の中でどんな計算をしているのかとても不思議に思いました。



巣の大きさは大小の 2 種類あり、その比率は働きばち全体がその時々の中での状況を考えて決めているようで、女王蜂は巣の大きさだけを見て、大きい穴には無精卵を、小さい穴には有精卵を産み分けるとのこと。無精卵からはオスが生まれ、有精卵からはメス(働きばち)が生まれるそうです。産み分けられるのも凄いの、無精卵から命が生まれるのにも驚きです。ましてや卵子だけなのに何故オスが生まれるの？そして更に不思議なことにそのオスは次の命を生み出す役割を果たすことが出来るのです。



端からではなく思い思いの場所から巣が作られていく

働きばちは、どこに蜜があるか、女王は卵を産んだかどうかなど常にコミュニケーションを取り合い、子育て、門番、エサ集め、掃除など、巣箱を良い環境に保つために働きます。

哺乳類は恒常性を保つために自律神経や免疫、ホルモンなどが協力し合うと言われています。

「みつばちの社会は 1 匹の哺乳類のようである。」なるほど、確かに似ていますね。

今回の講座でみつばちの生態はとても興味深く、環境を把握し、役割を分担して巣を守る知的な生き物であることや、あすみが丘はみつばちが育つ環境であること等が分かり、とても楽しい時間を過ごせました。また参加したいです。最後にみつばちの好花は何か質問したところ、「家庭で植えるならハーブが良いでしょう。」と。貢献できると嬉しいです。9 丁目坂本

「みつばちプロジェクト in 土気あすみが丘プラザ屋上」は第 8 回であります。興味のある方は下記からどうぞ。

https://www.toke-asumigaokaplaza.jp/event_news/『みつばちプロジェクト in 土気あすみが丘プラザ屋上/』



篠田宏画伯水墨画作品展示～ガーデンテラスにて開催中～



画伯、ガーデンコートにアートシーンを、有難うございました！
2023/6/24 ガーデンテラスにて回顧展を盛大に開催致しました。
その時、皆様にお分けした作品以外を引き続き展示しています。
一度ご覧になった方も、初めての方もどうぞお出でください。

告知応援 /NPO サードプレイス研究所

篠田宏さん：あすみが丘ガーデンコートに 70 歳で住み始めてからお亡くなりになった 90 歳までの 20 年余り、年齢を重ねても精力的に水墨画を描かれていました。(詳細はHPをご覧ください。 <https://www.npo-aifs.org/>)
※作品展にお越しの際は、ガーデンコート共有棟の受付で、篠田さんの絵を鑑賞に来たことをお伝えになり受付の確認をいただいてからご入場願います。

お知らせ

・とけサマーフェスティバル開催決定！ 2023.8.19(土)、20(日) 創造の杜にて

AIFS も出店します！ボランティア募集中！！申込は電話、またはメールで↓

TEL: 043-294-9551 (月・木曜 10:00～12:00) E-Mail: aifs@eastcom.ne.jp

・スクールビジット(留学生と土気高校生との交流)、ホームビジット(留学生と地域住民との交流)が今年復活！

・事務所夏休み 8月10日(木)～8月21日(月) (事務所はクローズします)



あとがき：発行前に何度も原稿を見ますが、今回は特にモン族の話を何度も興味深く読みました。英語のままでも分かるのもとっても良いのですけどね^^;坂本